

一脚御飯有銀器  
御菓子

一脚高盛御菜

一脚御比目

一脚平菜汁物

一脚同前  
一脚同前

### 已上盛銀平盞

〔年中定例記〕殿中從正月十二月迄御對面御祝已下之事

一御祝始○年はて、朝供御參候略○中丸桶とて、口一尺四五寸計なる鉢を赤漆にぬりたるに、あさぎのすゝしの絹にてはりたるふたをして、持て參て御かけばんにならべ申候、常は御懸盤にて參候、御臺様も同前に仕候、御精進の時は、あしの付たる折敷にてきこしめし候、御かけばんは御かけばんは、原書作御はんにて候、據一本改、いづれも外をせい玄つにぬり、内をば光明朱にてぬられたるにて候、〔枕草子五〕あきのぶの朝臣のいへあり、そこもやがて見んといひて、車よせておりぬ略○中からゑにあるやうなるかけばんなどして物くはせたるを見い、人なれば、家あるじいとわろくひなびたり、

〔小右記〕萬壽四年四月五日乙亥、余實資○藤原參東宮、若宮冷泉著袴日也略○中余先著座、内大臣已下相從、居衝重盞酒一兩巡、次供御膳懸香歟六本、淺

〔榮花物語木綿四手十三〕かくて御もとにまいる人々、すこしもかたくなしきは、えりすてさせ給、おはしましていらせ給へば略○中殿上人の座には、懸盤の物ども、いみじう玄すへたり、

〔榮花物語御著裳十九〕れいの様にはあらで、御懸盤のおもてを、うみのこ、ちにして、山のやうにすはまのかたにつくりて、さまぐのものどもをもりたり、

〔兵範記〕仁安三年七月十日己巳、今夕於院殿上有朝覲行幸定略○中定行幸雜事

一御前物

攝政申職人了

懸盤六脚紫檀地在打敷

行事重家朝臣

〔玉葉〕承久二年十一月五日辛卯、此日皇太子懷成仲三歳御著袴日也略○中供上皇鳥羽御膳予道家原調